



三好川伝説

桃
四十貳



○素禰同 俳修くまの興オコとほつぎをためるぞ

○後者 俳諧たれんはほシバ富にいはせの時うつくしさをあ

む今ホ葎オコ白くまの興オコとれん素あひり

おもてセ旋ドウカ頭ナカラ次ヤマトタケルノミコトコトのナカラ下ナカラはナカラをナカラ半ナカラひナカラくナカラ一ナカラ白ナカラとナカラまナカラはナカラ白ナカラ本ナカラ武ナカラをナカラ言ナカラ

奉フデ志フデ終フデかフデあフデれフデしフデまフデすフデ短ミジカウタ次ミジカウタのミジカウタ句ミジカウタをミジカウタ半ナカラひナカラくナカラ一ナカラ白ナカラとナカラまナカラはナカラ白ナカラ本ナカラ武ナカラをナカラ言ナカラ

事テ記テおテ出テたテれテちテちテらテはテがテこテしテばテめテるテはテ終テるテがテくテのテ名テをテ行テふテ

とコりコ

折テいテりテのテ款テハテ體テとテるテくテ別テてテ存テ名テもテなテしテこのテ由テ系テにテ志テ也テ

テ

コ

あはれいんを漢傳のハ格をぐくあとのハ格に詞の教はまゝに
テイハ格のほゞまゝのハ格をぐくあとのハ格に詞の教はまゝに
セドウカとく。二十八言を旋頭歌といひ一あるハ格の名もあやしく
オケケへハ格後のハ格をハ格といひ一あるハ格の名もあやしく
サキ先なるハ格にハ格といひ一あるハ格の名もあやしく
ソフ皆もなりハ格といひ一あるハ格の名もあやしく
ヨあはれいんを漢傳のハ格をぐくあとのハ格に詞の教はまゝに
タ事をおぼえたるハ格といひ一あるハ格の名もあやしく
タ事をおぼえたるハ格といひ一あるハ格の名もあやしく
タ事をおぼえたるハ格といひ一あるハ格の名もあやしく
タ事をおぼえたるハ格といひ一あるハ格の名もあやしく

くくくハ格にハ格をぐくあとのハ格に詞の教はまゝに
ハイカイテイ俳諧歌と多しハ格をぐくあとのハ格に詞の教はまゝに
エラハ異はて今やハ格をぐくあとのハ格に詞の教はまゝに
テイこの名を俳諧といふハ格をぐくあとのハ格に詞の教はまゝに
ハクダンハイワ別に俳諧多しハ格をぐくあとのハ格に詞の教はまゝに
ヨラケイデンの文考あやしくハ格をぐくあとのハ格に詞の教はまゝに
ミナモト源は古くハ格をぐくあとのハ格に詞の教はまゝに
フウカン源は古くハ格をぐくあとのハ格に詞の教はまゝに
カンセウ源は古くハ格をぐくあとのハ格に詞の教はまゝに
タガ源は古くハ格をぐくあとのハ格に詞の教はまゝに
ヒカイ源は古くハ格をぐくあとのハ格に詞の教はまゝに
タガ源は古くハ格をぐくあとのハ格に詞の教はまゝに

た先ぞあまが継後るをくトナ思ふ侍者おほ

○梅同 古の片歌をすむ

○後著 いけの傳書に思侍との多サハこそ一ヒト首二首サフタケサをあむ

波形 祁女 和岐 帯能 迦多 由久 元 章

多知 之 母 上代之片歌數首見
古今片歌明題集

まの日本武尊様にいまりて詠たよ侍けおし。愛に見はけ

の意を解む

は部 祁女 和岐 と 愛も侍とりの義し。和岐 帯ハ吾々意し。
迦多 由とハ方よりし。久元 章ハ吾々し。多知 之 母ハたち来侍

の意し

若にあまて古御を思ふるハ吾々家の才より立来侍をを謀不
愛も侍とりの意るは。古今歌人の情ハ一し。よに御をく

一々情の意るをを見侍へ

あ今より心を旋歌の片歌と唱ふ侍ハ十七言有侍が短おた

くも侍ハ今も侍おは鼓白く侍く十九言有侍ハあつて古

ども今出まふあつたる心は別ワカむたぬに旋歌の片歌と唱ふ

まむく十九言十七言十四言有侍も侍侍くこの名目と書

○梅同 盤溪 禪師を継祖と志くすまふ書 河原と坂の

○後者世の人芭蕉を俳祖とすはあやまらざるに後には
ハクセンリウ 俳仙窟に後禪師とすをゆる禪師ハ貞徳の作範テイトリクありと
ニサコト はいれり連歌の體をまねに及しは俳祖法はたけり
 祖もいふも今俳詩の多を古いふを禪師ハ俳詩の祖とい
 びふべし

○梅岡古の片歌をまくにまゐり今やうまゝの曲をまゐり梅
 岡いふ

○後者古の片歌をまくにまゐり今やうまゝの曲をまゐり梅
 岡いふ

大に異なりはるくは雜サウと季節節のくハ、題亦も旋風前も季をい
 尚しとを必ともば今やの片歌ハ季節をりて心チカレの蓋を季
 節をい尚しハ、題亦と片歌との異體もつゞく、又今やの片歌
 ともいふ愛の月香をこの心とめをへきたのニトコリ一はまはるは
 季節を必ともば亦も理ありたうたをまはるはあつけさには
 ありつり海はたをまおもひニシケレ干衣なまはるありつりつゞく
 ありつり海はたをまおもひニシケレ干衣なまはるありつりつゞく
 ありつり海はたをまおもひニシケレ干衣なまはるありつりつゞく
 ありつり海はたをまおもひニシケレ干衣なまはるありつりつゞく

○梅岡 名不の雜のちもまゐりんハ芭蕉の翁はつとむにあり

あり藤イ子とくんとあはれ意コシロウしたのづく〜
コシロウ田芳日イとらりしに
イ後あり

すて漸火焼の老人泣カバ涙ハ如賀那信ナヘテ氏の考ハ考てた心もほ望
能くカガミ鑑カをばし又カミナ屋ナ並てのそろあ望はユビ指ヲルを屋ヲ〜して

くしハ指ヨリを屋カかきカ并カは指ニ日ニをそりてトヨカ十日カも今あり
まごイ子座カはニいニあニをトりてニ并カハユカノあリる

是より見サキにいニた先ニ〜又萬葉卷ハはハ尼ノのよめ泣
サホ佐保カ河カ之水ハ争ミ寒カと白ク強ク田ノ手ヲ

オホトモノスミ大伴カ宿カ祢カ家カ持カ〜れニ續ツギ白ク〜
イ白ク

新流カ早ル飯ワ者イ獨ハ索ヒ海ナ依レ也

古也今やうにヒキ依ヒりてニ水ノをヒキ塞トクとくメウエ田ノ殖ハりるやヨ後ニ世ニ歌ハ人
い例ハる〜いハとハるヲをヒキ奉ニぐニ下ルるヲをヒキ下ルるヲをヒキ出シてノコ
白クをヒキりてノいハ例ト

○梅ウメ同ドウ連レン歌カのおハこハいハ海ノもハおハのハ大ト先ニ〜
ウメ梅ウメ同ドウ連レン歌カのおハこハいハ海ノもハおハのハ大ト先ニ〜
ウメ梅ウメ同ドウ連レン歌カのおハこハいハ海ノもハおハのハ大ト先ニ〜
ウメ梅ウメ同ドウ連レン歌カのおハこハいハ海ノもハおハのハ大ト先ニ〜

○後ウメ昔ウメ此ウメ例ウメ古ウメいウメ〜
ウメ後ウメ昔ウメ此ウメ例ウメ古ウメいウメ〜
ウメ後ウメ昔ウメ此ウメ例ウメ古ウメいウメ〜
ウメ後ウメ昔ウメ此ウメ例ウメ古ウメいウメ〜

舞マヒ踏フミ志シ志シとハいハにハ背セりニ〜
マヒ舞マヒ踏フミ志シ志シとハいハにハ背セりニ〜
マヒ舞マヒ踏フミ志シ志シとハいハにハ背セりニ〜
マヒ舞マヒ踏フミ志シ志シとハいハにハ背セりニ〜

片歌二枚同巻

るもび俳式の多るゆもびびくしと流しとてあつたまもあつた
のうらゝかお月をるもび

さしど連袂の式は中し根はも文もさしりまをさるゆもあつたまもあつた

さしど嫌ふとていひあへいひも根の割は根の割器もさしだたる

志は時ハ新詞の愛とるさる根の割はさるゆもあつたまもあつた

なれを月あつたもさるゆもあつたまもあつた

あつたにさつとさるゆもあつたまもあつた

諭しと流しとさるゆもあつたまもあつた

さしどさるゆもあつたまもあつた

梅向 秀安く日影がハ上を魂の跡は園はくさるゆもあつた

心をあつたも文もさるゆもあつた

あつたまもあつた

○ 後 若 向 の お と 言 魂 は 園 は 今 や は 片 ぶ ち と 流 し 詞

の こ し 父 を 法 理 を も つ け ち 作 ら ぶ 身 を 以 文 を あ つ た

正 字 を も つ け ち 父 を も つ け ち 父 を 以 文 を あ つ た

て 今 の 中 に 字 を も つ け ち 父 を 以 文 を あ つ た

徳 字 を も つ け ち 父 を も つ け ち 父 を 以 文 を あ つ た

さしどあつたまもあつた

○後言 文まよひハ此度あり先キテ 歌のまよヒと異ニテ
 文まよひと云ふは ば正字のまよヒを云ふ也。又久しく誤り
 せし是を改めざるとい故も 誤と云ふも改めばんや。まよ
 短歌にまよヒ行かぬハ今あり先テ正字をまよヒと云ふは
 まよと云ふは 正字のまよヒを云ふ也。又改めばんや。まよ
 字もまよヒ毎田のまよヒと云ふは 相照して正字をまよヒと云ふ
 といふも 入るる物者ハまよヒと云ふも 正字のまよヒも 情解と云ふ
 なるも 誤り。此林と云ふは 正字のまよヒと云ふも 正字のまよヒ
 といふは 誤り。誤りにては 歌のまよヒと云ふは 正字のまよヒと云ふ

漢やまを和といひ 去るは 漢文字ハつらつらと云ふは 人の誤り
 あまは 和く正字のゆきと云ふは 和くおぼゆる時ハ
 今法 認まをりて 正字と云ふは 正字と云ふは 正字と云ふは
 ○ 辨向 それが 辨に 辨香花と云ふは 正字と云ふは 正字と云ふは
 辨向 それが 辨に 辨香花と云ふは 正字と云ふは 正字と云ふは
 ○ 漢言 それに 漢言のまよヒに 辨向のまよヒに 辨向のまよヒに
 漢言 それに 漢言のまよヒに 辨向のまよヒに 辨向のまよヒに
 ○ 鬼道 鬼道のまよヒに 辨向のまよヒに 辨向のまよヒに 辨向のまよヒに

鷓鴣花けいし。是かきし。鷓鴣花に鷓鴣の字を添へるべし。
 文をそめてある也。鬼蓮オニハスなほと志保へ一峰けいしとたがえ
 たは言はすの羽じびいだめを知得とそがはしむる也。
 志保にも偏屈カメムキに鷓鴣の字は漢者こぞいふ。そのハ漢者も
 してを解ゲせしふ人し。漢者といふは漢去の事也。唐人といふを鷓鴣と
 いふべし。キイテウとつたふはごく日本ヒノコトノエト人キイテウと見え
 たるも。その事す。唐人といふはごく。唯キイテウとおやえし。海
 のこと。九月廿二日。きし。ひつり。漢者といふ。異者といふ。新別名。海
 に似る。異國人の身にも。海も。漢者といふ。漢去人の身にも。

五ゴぞゾのノたタ。並ナリにニ日ニッ本ポンはハ漢カン者シャをヲ訓スじ。本ホンハハ韻イン鏡キョウをシテ考コウ入ニツるルをシ
 とも。本ハ漢去にあらはるべし。著し。おけ。日ニッ本ポンはハ本ホンのノ事コトなり。
 何ナニぞゾあハれレをヲ漢カン音オンといハふハむハだハつハむハ道ミチハハ入ニツ聲セイのノ字ジなり。
 唐人トウジン名ナをヲキキとシてモ日ニッ本ポンはハ本ホンとシてモ又マタ通ツウてモ字ジに
 訓ユミるル多タくクのノ字ジを入ニツたハはハ日ニッ本ポンはハ本ホンとシてモ五カニ加カハハ度タク者シャなり。
 こそノ字ジを入ニツれル日ニッ本ポンはハ本ホンとシてモ核キ校カウのノたタひヒをヲたタ先ケンへ
 おホへハしシりリ今イマやヤのノ片ヘ款クワンにニおホりリ傳デン表ヘイ訓スのノ通ツウ文ブンにニおホりリ
 〇論ロン同ドウ古コもモ聖セイ徳トクとシてモよヨにニ在ニるル人ニン数スウをヲとシてモたタはハたタあアらラず。
 おホのノこコとシてモ家ケとシてモ年ネンにニ負ツクはハるル也ヤ。並ナリにニ道ミチ者シャはハ道ミチ者シャなり。

稱せし海の中後支考表林名を去は此人へはるぞよく事せ
正法は海

○後言 貞徳といささか此季の秋をとりて家なるをさしど
志の是く正異る所や。是ハ秋是ハ俳諧をとりて別く俳諧ハ
正法の戯言とて海に秋を解く時ハ中一俳諧の時を
漫にもふも又思ふまじく俳諧をひるべし。此は季の俳諧
の家は兼ある。是を正法とるも何れも此は兼あるを以てかの
おく。余の人種うまこいさむ。又考志はさし。是ハ俳諧に
係をまき。日本秋に替むむ。此は兼にさし。俳諧にさし

賤さし海^{オツ}芭蕉表林ハ河の末より。いさし秀と係ある。是ハ
俳諧とのそけし

梅阿志くばし。河ハ芭蕉のそ。表林ハさし。

○後言 けつてははつて。此を係とて大に取捨あり。是芭蕉
にわけ海^{ナカバ}ハ後世に毒をさす。或ハ後世に兼をさし

○梅阿 審ははむ

○後言 世に俳諧するもの。多く引り。芭蕉の後ハ故に芭蕉
にさし。さし人か。一室におい。おのく作は。後の言。此
も芭蕉にさし。何れあり。許し。芭蕉の毒をなす。保し。とせ知

かやうのみ言をよこに重くしん下にいなる侍雑言のよも二白紙相
をならぬあやもやまぶはききの影におほえしなることすこ下
み言の割をとりまはるめと細しれた相と細をとりまはるめと
しはのあやもやまぶはききの影におほえしなることすこ下

系下み言

山の笑こ	野遷家	紙燭か
門の塙 <small>カキ</small>	ふぐりか	小はらうづみ
槍 <small>カス</small> 古 <small>コ</small> 々 <small>チヤウ</small>	三布ぬん	麻角 <small>トサカ</small> 菜 <small>カ</small>
湯取 <small>オトリ</small> 城 <small>コシ</small>	出逢うか	秀世 <small>ヒデヨ</small> のぬ

こまごま

朝ノキ橋バか

落ラるガか

やぬと家

料理リヤウリは間

世セ々ナ々カ海

別ベツ座ザ後シキ

三ミ月ツキ城コシ

昔セ中ナつカき

道ミチ堂ドウ野ノ

茶チヤみミ鉢ハチ

酒サケみミ鉢ハチ

男オトコのぬ

アアタタニニ

脊セ戸ドのノ菊キク

昔オト戸ドのノ城シ

湯カ堂ドウのノこコよヨ

是う申にふはらうづき水橋が男をなすハ何の難うあらむと
りふくもあらむらふふ蓋の相はつすりの後をの言割をとりまはるめと
ハ知情人においておほえしき水橋が男の二つも河をなすは

春はに源一

テバナ
のほくむきさく梅の葉の光り

とよあまのほほほへひのまどふくかへく白たねはまの

まへに耐く備法を野へはゆるしよの葉にまへ

ほよほくちかむい人のまじりてはゆるしよの備法を

あぶゆるけちを振くをほゆをぬち葉はをいふ

よほくちをわりのほゆるしよ人のおひはまをゆるしよ

相をよほくち

ヨモ
強くう蒼まへくいまはたの春

世の人おまはたあへてはゆるしよのまじりてはゆるしよ

ユモ
蒼まへくちをわりのほゆるしよ人のおひはまをゆるしよ

ユタカ
はゆるしよをわりのほゆるしよ人のおひはまをゆるしよ

リンフリ
新緑にゆるしよをわりのほゆるしよ人のおひはまをゆるしよ

ケレン
いまの相下ゆの若に耐くはゆるしよのまじりてはゆるしよ

アガメ
りほゆるしよをわりのほゆるしよ人のおひはまをゆるしよ

クン
まの字は川を音のまはゆるしよ人のおひはまをゆるしよ

アガメ
あつてはゆるしよをわりのほゆるしよ人のおひはまをゆるしよ

あつてはゆるしよをわりのほゆるしよ人のおひはまをゆるしよ

まはーやま^{クサエチ}の鏡^ホに出つゝむ

此の^ホ鏡の鏡は^{スリ}の^ホ影を^{アガリ}映し

はーま^ホの^ホ影の^ホ影^ホに^ホ影を^ホ映し

い^ホま^ホの^ホ影の^ホ影^ホに^ホ影を^ホ映し

近^ホり^ホ影^ホの^ホ影^ホに^ホ影を^ホ映し

い^ホま^ホの^ホ影の^ホ影^ホに^ホ影を^ホ映し

事^ホを^ホ映^ホし^ホて^ホ人^ホの^ホ影^ホを^ホ映^ホし

り^ホに^ホ映^ホし^ホて^ホ人^ホの^ホ影^ホを^ホ映^ホし

ま^ホは^ホの^ホ影^ホの^ホ影^ホに^ホ影を^ホ映し

ま^ホは^ホの^ホ影^ホの^ホ影^ホに^ホ影を^ホ映し

う^ホま^ホの^ホ影^ホの^ホ影^ホに^ホ影を^ホ映し

ま^ホは^ホの^ホ影^ホの^ホ影^ホに^ホ影を^ホ映し

い^ホま^ホの^ホ影^ホの^ホ影^ホに^ホ影を^ホ映し

ま^ホは^ホの^ホ影^ホの^ホ影^ホに^ホ影を^ホ映し

い^ホま^ホの^ホ影^ホの^ホ影^ホに^ホ影を^ホ映し

ま^ホは^ホの^ホ影^ホの^ホ影^ホに^ホ影を^ホ映し

い^ホま^ホの^ホ影^ホの^ホ影^ホに^ホ影を^ホ映し

ま^ホは^ホの^ホ影^ホの^ホ影^ホに^ホ影を^ホ映し

ついでに得に得とつけむがうと人殺感ひくが得とつけの
酒の例おつべに酒にまつがうに得とつけの

おれおれとつておれおれとつておれおれとつておれおれとつて

晴る人のおれおれとつておれおれとつておれおれとつておれおれとつて

難言にうとつて又一編に昔意をうとつて昔意は天下の人を

取捨を何のあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

取つてもおれおれとつておれおれとつておれおれとつておれおれとつて

後人辨はる昔意の毒にあつてもおれおれとつておれおれとつて

ついでに得に得とつけむがうと人殺感ひくが得とつけの

昔意にあつて

又

瓜の皮むつておれおれとつておれおれとつて

由裡離縁を偶て是れ御 けかきよ

尋常や古るものなれは昔意の毒

御命毒や油のやうな御 五体

似合いや新とぬくべ茶五体

此たぐひきよとて五量の意味あるも何うせむ世に昔意を

おれおれとつておれおれとつておれおれとつておれおれとつて

アケ 殊に海をくぐりてのまが御代のまといへば芭蕉を海をくぐりて
ふり下のまがを志すべし

○梅岡 此況大に奇なる事とせむ芭蕉一世のまがといへば
けみ海をくぐりてのまが

○後言 余今のみまが梅岡にてあはれものまがといへば
集を擧ぐりてのまが梅岡にてあはれものまが

○梅岡 大人童く宣ふ芭蕉におけあはれものまが
といふ物をまがむ

○後言 昔よりいふく梅岡のまがといへば
まが

ヨキ のまがといへば及びごとく先今やの片まがといへば芭蕉にお
らまがしてすまがあはれものまがといへばまがといへばまが
をまが

あうくと日ハつはるくも海のま
海をくぐりてのまが
夏まがや兵士どもがまがの河と
むざんやまが曹の下まがといへば
まが海や休波に横まが 根漢
まが月まがをあつめてまが 名と川

夕日や六日も暮の長にを細き

炎閃イナツクや晴ヤミは方ゆく旋カ目井のま

山里シハ菊キ草クの庭ニ梅ウメのトうチを

ともかくも方ゆくや雪の枯カ花レ芒ヲ花ハナ

喚ウ起グるヒスヤ神カミのウうチ海ウミ道ミチはナあ

山ヤマ路ジもモくク何ナニやヤうウけケーエ草クサこコ菜ナ

岩イ子コまマくク人ヒトにニやヤまマくク絶タ頂ツが

是等のたぐひおにもあはるるが家にあはえむ

○梅ウメ同ドウ 芭蕉ハヤシのノるルをヲ見ミ返ヘにニもモとトぬヌをヲ格カ下ゲにニあアはハむムじジのノ

まゝえし人の思ひ入侍を異るるを異るる歌り

○後ノチをヲ見ミ返ヘにニもモとトぬヌをヲ格カ下ゲにニあアはハむムじジのノ

先マにニあアはハむムじジのノ

小コおオ魚イサさサ尺シヤク柳ヤナギ涼スズシーエやヤ簀サ丁テがガ家カ

おほオホくクはハーエ小コ葱ネギかカくクのノ鮎アサギ志シ湯ユ

夏ナツもモくクもモ呼ヨ下シのノ葉ハはハひヒくクのノ水ミヅ

月ツキもモくク精セイハハるルをヲりリちチるルをヲりリ

涼スズシーエさをヲ赤アカ君キミにニてテ孫マコまマ保ホるル

そソ不フとトーエ馬ウマ唐カラ才サイとト茶チャ法ホウ法ホウゆユ

かほ境サカヒにいりてハ世の人及びまにあつじ

又

ユフがホ 壺カバヤもや 東の厨シロクに紙幅シロクと置く

けたぐひ漫ヒカリにのひ持オモキをよめにあつじを越ヨルと相ヨルを授ヨルや
すかろくまといをも

○梅同 糸車オモキびとといも。中オモキをいさハ大凡オモキ好オモキより。古オモキはあつじ。

まて度カラサキ碁乃ムクゲ白とさなきは本ムクゲ樵ムクゲをぐやゆ保ムクゲ自世の人ムクゲはあつじを
あげくあると称セウを。其ワイダメを辨別ワイダメをせよむ

○後者 是等コレラの白シラバ。酒シラバをまらふはゆきクイのさつじクイのさつじクイ

の理ワカを事コトだつじ。ハハは世ヨむハ後ウシに葉ハをまらふと持モ入ト

梅同 中オモキの者モノハハ赤アカ行イカン

○後者 糸車オモキハハ白シラバとあつじ。先マ試シに古コは度タク保ホと樵シラ

る。のまをるをまらサキに出デせ保ホるに葉ハあつじ。幾イク度タクもく法ホウは
せよ。酒シラバおろして碎シラせん

○梅同 世ヨに結ツ言クハをて目メとるは古コ人の白シラバに又オモキ多シカくは保ホる

○後者 得トク言クハハ糸イトの酒シラバは目メにあつじ。はけたぐひハ保ホ中チウは保ホ。
保ホるに糸イトの糸イトお出デせ保ホるをまらサキのハ保ホ中チウをまらサキのハ保ホ中チウのまらサキも保ホ中チウのまらサキに保ホ。
唯タラシハ今イマはまらサキに保ホ中チウのまらサキも保ホ中チウのまらサキに保ホ。

これぞ夏時し

○梅岡 イザヨヒ マチチキ井チヲニチ 十六夜十七夜十八夜十九夜のたぐひ月の名目いふを
まじや

○後答 ヒフヨフヤ 古にありてあはれもあはれなりていふものいふは猶ほ
今 意に ヒヤウカ 既に澄みおほしき世の中は世のゆほにあらま
夜の月さきさき月一十七夜とてたちまち一十八夜
おもしろ月一十九夜とて一十八夜は月一十九夜
あゝいづ改に今や法行がいのまはるるついでに
月ハ者くべいばたぐひのまはるるにげんがなるいづ

り一古の行がいのまはるるは猶ほよまひていふはもをたむに
考へおほしき一りて今梅が原中に

井ニチンキアケトユハユフサレハ
塵行月岡乃門徒者暮去者

と萬葉集にもあるは古くいふは御相のぐ一十八夜の日と
はえどこれいば月の名はたはゆふたぢまちち一まぢの目と
てもおもひひもいふるらん又萬葉にたちまち法行のたぐ
ゑのこれいづひきとて月とて法行なり。源氏の物語に
いハ十七日の月とてまぢちち記にいハ イリカ 幾見くと アテ ちちハ
後の世にまぢとていづ。又廿二日はとて法行のたぐひとてまぢ

行夜二夜行

モチツキ
十日日出之月乃高高也

ともみおの望月もつぎきたる十四日おは望月ハ後世
の徳作にてあらじ後ハ是らハ新日次月とせける
御月ここの花月とてハあはれ月にておはれあり
やしくとせハきよき月のおき

ゆるりからくついでしんすのこころとて文科のるき
終に晴のはじめよりらるゝ銀者は不の青は晴をば
る後もさへいづくらけらさるゝるるるるるるるる
○梅岡 ありもあはれんまのあはれんまのあはれんま

○後春 ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんま
ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんまのあはれんま
ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんまのあはれんま
ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんまのあはれんま
ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんまのあはれんま
ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんまのあはれんま
ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんまのあはれんま
ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんまのあはれんま
ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんまのあはれんま
ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんまのあはれんま
ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんまのあはれんま
ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんまのあはれんま
ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんまのあはれんま
ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんまのあはれんま
ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんまのあはれんま
ちんばけのあはれんまのあはれんまのあはれんまのあはれんま

たすおのびにゆるるる

○後者 ニカ そんなものさへおのびにゆるるる

はなはたおのびにゆるるる キヨラク

おのびにゆるるる サイバハラ

おのびにゆるるる セウカ

おのびにゆるるる セウカ オハイ

おのびにゆるるる セウカ

おのびにゆるるる セウカ

○協同 継代の名を繕て片がし オキ

にやほろ

○後者 ナスコト おのびにゆるるる ゲンロイ

おのびにゆるるる ウツン

おのびにゆるるる

○協同 イカン 協同

おのびにゆるるる ムニレウチ

おのびにゆるるる ヒトレ

おのびにゆるるる ムニレウチ

おのびにゆるるる ムニレウチ

たすおのびにゆるるる

たすおのびにゆるるる

うめなるは境にもはばけし才を授ぬを曲へんをいほはかむ
りみ大に夏へのたがへばよりみか

○梅同 文喜はまといふむ

○後言 又まよひかへる一はたやましは文喜のあはれ
キヨリクシカウ トモガ
神六まよひのまよひの文喜かへりしむのまよひはかむ
全くまよひの文喜かへりしむのまよひはかむ
まよひのまよひはかむのまよひはかむ
文喜まよひのまよひはかむのまよひはかむ
たは片歌のまよひはかむのまよひはかむ

か。中。河。の。多。後。の。歌。も。づ。も。出。た。の。時。後。後。の。歌。も。今。の。後。後。の。

古の修後にしてたごむ人後集の集はを歌に

ヒサナラバ イミナスカバカリハヤカラバ イミフツカバカリ
久有者今七日許早有者今二日許

アラン トツ
将有者

けたがひ今の修後におほりぬ今この片は文喜に對して
あゝんて志はべ

○梅同 今やた片歌音はまよひもあま文喜ハ初のを聞

ふはいつむ

○後言 ありしごとく訓くしひをくしひ神かゝるあはれは

くしど皆日は此泪に〜^{イコリ}交に異國の音かもあるにた〜^{ハナカワ}はまが
片家の泪は風塵も^{クビヤク}孔雀も^{セニタチ}も^{カワリキ}別カも^{カワリキ}あつたを
あををりか又女まは泪をうた^{ワタシ}自まは^{ワタシ}あつたをうた^{ワタシ}〜^{ワタシ}

○^{ワタシ}福岡 片家をのりて〜^{ワタシ}あつたをうた^{ワタシ}〜^{ワタシ}

○^{ワタシ}後巻 片家をのりて〜^{ワタシ}あつたをうた^{ワタシ}〜^{ワタシ}

そは片旅かまびら〜^{ワタシ}あつたをうた^{ワタシ}〜^{ワタシ}あつたをうた^{ワタシ}〜^{ワタシ}

歌

かく〜^{ワタシ}あつたをうた^{ワタシ}〜^{ワタシ}あつたをうた^{ワタシ}〜^{ワタシ}

吸露菴 あや〜

寶曆十有ニ癸未年春二月

新木キツ、キをたす流タをく過くや幅ハタ牛ウシ 黄牛

見はふびにうしろ姿シラシぞおとくトクに 麥汀

連立ツラナく船フネくくクふや多タ蛇ヘビく 双瓜

淡夢ウススミ中ナカ人ヒトになりナリりリ夢ユメ夕ユフくクにニ 笑洲

物モノにニくク持モチ保ホはハまマやヤ一イチ罌ケイ粟スをヲ心ココロ花ハナ 胡曉

夏ナツハ名ナのノ言コトいイ坂サカありアリ 瓊トコロ脂ニ菜サイ 亂鴉

水ミヅをヲ流ナえエくク庭ニワ保ホやヤかカまマはハむムくク 露圓

葉ハ破ヤけケ狭セくク石イシ敷シいたイくクむムくク 樹峰

字ジ探タンやヤくクみミのノ志シまマひヒまマ一イチ里リ塚ツカ 燕山

赤アカササカカホホ 赤アカ花ハナやヤ姑メのノ好コトくク丁チヨウ後ゴにニ後ゴくク 里橋

ぬヌとトあアろロにニ糸イト流リウつくツクをヲやヤ布フ 穀コト 吹雁

巻マキくク息イキのノ見ミくク古コくク堂ドウくクのノ水ミヅ 平胡

又マタつツ先マタくクもモ勤チカぬヌ杜モリやヤ帳チヤウのノ一イチ糸イト 梅卿

女メ侍シくクをヲ梅ウメくクくク花ハナ保ホるル百ヒャク合ガフ花ハナ 可笑

目メにニくクをヲくク花ハナのノ流リウ保ホくク 堂ドウくク那ナ 東奴

灌カン佛ブツやヤ流リウくクくク分ブン至シ松マツ道ドウ身ミくク花ハナ 星露ホシツル

四季

舟フネてテゆユくクやヤくク分ブンありアリ 阿ア里リけケふフ 輪リン 素輪

探^{イナヅメ}策^{イナヅメ}に花と書せし新^{イナヅメ} 糸^{イナヅメ}ハ 全
熱^{イナヅメ}閃^{イナヅメ}や目の赤に^{イナヅメ}く 曇^{イナヅメ}くゆく 全
煙^{イナヅメ}ひし^{イナヅメ}紙^{イナヅメ}や^{イナヅメ}習^{イナヅメ}り^{イナヅメ}る^{イナヅメ} 漆^{イナヅメ}の^{イナヅメ}星^{イナヅメ}こ^{イナヅメ}丁^{イナヅメ}海^{イナヅメ} 全

篠^{スハ}魚^{カケ}を^{スハ}志^{スハ}し^{スハ}く^{スハ}進^{スハ}み^{スハ}は^{スハ}ら^{スハ}く^{スハ}ハ 破^{スハ}了^{スハ}
傍^{クイ}ろ^{クイ}歩^{クイ}く^{クイ}や^{クイ}う^{クイ}か^{クイ}守^{クイ}あ^{クイ}里^{クイ}山^{クイ}は^{クイ}ら^{クイ}く^{クイ}
吹^{クイ}飛^{クイ}て^{クイ}杉^{クイ}は^{クイ}一^{クイ}首^{クイ}や^{クイ}山^{クイ}さ^{クイ}ら^{クイ}く^{クイ} 東^{クイ}起^{クイ}

銘^ヨの^ヨ神^ヨも^ヨ伐^ヨら^ヨひ^ヨを^ヨま^ヨし^ヨ一^ヨ途^ヨは^ヨら^ヨく^ヨ 吸^ヨ露^ヨ菴^ヨ

あはれはちかたなるむおほくともを
さハ何ういッガ書ノ夕にハこころを

吸露菴藏板

江戸通本町三丁目
須原屋市兵衛



